

本当の自分でいられる社会に

柏原中学校 三年 谷垣 葵衣

先日、父と靴を買いにスポーツ用品店に行きました。気に入った靴が見つかり、店員さんにサイズが少し大きい靴があるか尋ねると、もう一足別の靴も一緒に持ってこられました。違う色のものもあると、紹介するのかなと思っていた私は、店員さんの言葉に違和感を覚えました。

「レディースはこちらです。」

買おうとしたのは、「メンズ」と表記されていた商品です。私が思ったのは、メンズもレディースも気にしなくていいのに、「レディースだから」と紹介する必要はないということです。店員さんは、無意識だっただろうけれど、LGBTQやLGBTsのように多様な性がある中でのその発言には、傷つく人もいるのではないかと思いました。そして、もしかしたら私も、知らないうちに誰かを傷つける発言をしていたかもしれないと思い返しました。

私は小さいとき、スカートやワンピースのように、ひらひらしたピンクの服を着る、髪をくくるなど、「女の子っぽい」と言われることをするのが好きでした。それがいつからか、服は黒か紺色にジーパン、スカートなんてありえない、髪は短い方がいいなど、「男の子っぽい」と言われることの方が好きになりました。「かわいい」よりも「かっこいい」に興味があり、周りの女の子と何か違うところがあることに違和感がありました。私は、心と体の性は同じだけれど、価値観や好みが違うことで、周りの目や反応を気にしてしまい、友達と関わりにくいと思うことがありました。今では、私以外にも同じような友達がいることを知り、「自分らしさ」として捉えられるようになったので、「私らしい私」で毎日楽しく過ごせるようになりました。

今、日本に限らず世界では、性の多様性が重視され、LGBTQやLGBTsに対しての意識が大きく変わってきています。国によっては同性婚が認められたり、東京オリンピックでは男性から性転換した方が女性として出場していたりします。学校の制服は、ズボンかスカートかを選べるところが増えてきています。このように、選択ができるようになった、選択の幅が広がったという点では、以前よりは自分らしさが出しやすい社会になってきたと思います。

しかし、選択ができるようになっただけでは、自分らしさが出しやすい社会になったとは言えないと思います。自分らしさを出すということは、周りの人が自分に対して持っているイメージとは違う姿を見せるということです。そして、それはものすごく勇気がいることで、周りの目や反応を過剰に気にしてしまいます。それでも、勇気を振り絞って自分らしさを出した人を前に、私たちは受け入

れる準備ができているでしょうか。

私は、スカートをはいて学校生活を送っていますが、本当はズボンをはきたいと思っていました。スカートかズボンかが選べるということは分かっていたのに、ズボンをはくという選択ができなかったのは、やっぱり周りの目を気にしたからです。ズボンをはいて学校に行ったら、周りにばかにされたり、「女の子はみんなスカートをはいているのに一人だけ」と、変な目で見られたりするのではないかと不安に思いました。

私が選べるのに選べない経験をしたように、同じような経験をした人がたくさんいると思います。LGBTQ や LGTBTS の人の体験を調べてみると、『『本当に着たい服』と『実際に着られる服』がある』『本当に気に入った服を堂々と着たい』とように、体の性と心の性が違うから好きな服が着られないという声や、「普通を演じることで自分を守っている」「本当の自分を隠して生きている」のように、自分らしく生きられないことは、生死にまで関わるくらいのことだという声がありました。彼らは、私たちが自分らしさを出しにくい雰囲気を作っていることで、本当の自分を隠すしかないのです。そして、それに気づかない私たちが無意識に傷つけ、また自分らしさを出せなくすることにつながるのだと思います。

私は、誰もが「本当の自分」でいられる社会にするためには、相手をよく知り、その人その人の「自分らしさ」を受け入れる、またその準備をすることが大切だと思います。男女で分けなければならないところは分けて、分ける必要のないところは、男女の選択肢をなくしたり、新たな選択肢を増やしたりするとよいのではないかと思います。病院では、体のつくりの違いで、男女の区別はしなければなりません。服や靴は男女で体の形が違うので、メンズ、レディースと分ける必要もあるかと思うけれど、男女の区別のない「ユニセックス」の商品を広めるとよいと思います。公共施設では、更衣室や浴室、トイレなど、男女の性別に縛られない選択肢をもっと増やしていく必要があると思います。